

土木學會選奨土木遺産

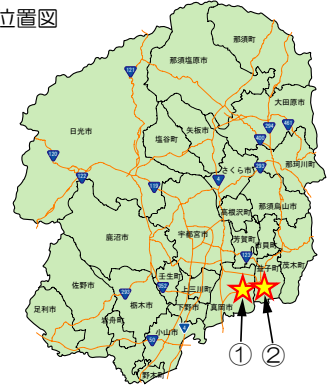
も お か て つ ど う ご ん ぎ ょ う が わ き ょ う り ょ う こ か い が わ き ょ う り ょ う

真岡鐵道五行川橋梁・小貝川橋梁

平成23年度認定

- 所在地：①栃木県真岡市、②栃木県益子町
- 完成年：①1894（明治27）年推定、その後1913（大正2）年に転用
②1894（明治27）年、その後1913（大正2）年に転用
- 構造形式等：①鋼ワーレントラス（英国製、ポニー平行弦、ピン結合、下路、煉瓦橋脚）
橋長42.71 m、スパン29.98 m (T+g)
②鋼ワーレントラス（英国製、ポニー平行弦、ピン結合、下路、煉瓦橋脚）
橋長42.90 m、スパン29.97 m (T+g)
- 管理者：真岡鐵道株式会社

位置図



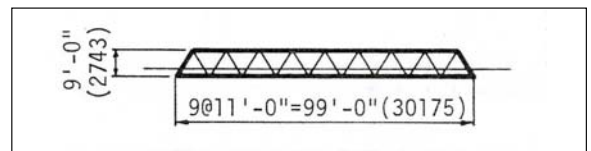
真岡鐵道は、1910（明治43）年に公布された「輕便鐵道法」により、1912（明治45）年4月1日に真館線として下館～真岡間が開業した。その後、1913（大正2）年に真岡～七井間、さらに1920（大正9）年に茂木まで延長され、真岡線全線が開通した。現在、開業から99年を数え、来年2012（平成24）年は開業100周年の節目の年を迎える。この間、栃木県東南部および茨城県西部地域の産業の興隆と地域の連結強化に大きな役割を果たしてきた。総延長41.9 kmに46橋梁が架設されており、五行川橋梁と小貝川橋梁はこの真岡鐵道に架かる橋梁の代名詞ともいえる橋梁である。

①五行川橋梁



さて、わが国の鐵道草創期に橋梁の設計を担ったのはイギリス人技師であり、幹線鐵道の骨格が形成された明治10～20年代にかけて、特に本州ではイギリス系トラス橋で占められた。イギリス人技師のうち、明治15年から明治29年までの14年間にわたり技師長（当時の名称は建築師長）を勤めたのがC.A.W.ポーナルで、支間長の標準化などわが国のその後の橋梁設計に大きな影響を与えた。明治29年のポーナル帰国後は、アメリカ人技師クーパーおよびシュナイダーが後任となり、それに伴い鐵道橋梁もイギリス系からアメリカ系の橋梁へと移行していくことになる。真岡鐵道に架かる五行川橋梁および小貝川橋梁は、このイギリス系のポーナル型ピントラス（99ft、ポニー）であり、鐵道草創期の鐵道橋梁として貴重な橋梁である。

②小貝川橋梁



また、鋼材が貴重だった当時におけるこれらの橋梁は、機關車の大型化に伴い幹線鐵道から地方の線区に転用されたものが多く、この2つの橋梁も幹線から転用移設されたものである。小貝川橋梁の銘板から、明治27年 Patent Shaft & Axletree 社製であることが確認されている。五行川橋梁には銘板はないが、小貝川橋梁と同時に製作されたものであるといわれている。

この2つの橋梁は、現役最古のポニーワーレントラスであり、また、イギリス積みで組成された煉瓦橋脚とともに、わが国の鐵道草創期における往時の風情を今に伝える貴重な地域の歴史遺産である。

